特　集：〔地域農業将来の展望〕　その1

東北地域農業を展望する

東北農業試験場長

菅　益　次　郎

ま　え　が　き

「東北の農村」ということばは，多くの人々にある種のイメージをいだかせる。とくに戦前派の人にとって，数年に1回は襲ってきた冷害，娘の身売り，家出少年と暗いイメージが多かったものである。ところが今はどうだろうか。戦後のめざましい稲作技術の進歩，米の自給政策による米価をはじめとする米中心の諸施策などで，稲作を主体とする東北の農家の所得は大きく伸び，昔の暗いイメージは薄れている。

さて，米の生産調整という一時的なかげりはあったが，これからの東北農業はどういう歩みを続けるのだろうか。その前に少し現状を見ることとしょう。

1.　東北農業の現状

東北では，産業の中で農業の占める比重が重く，就業人口や生産額の割合が全国平均の倍またはそれ以上である。このことを裏返すと，他の産業とくに製造業などの工業化が遅れているということでもある。（表―1）

表―1.　農業と他産業の関係（%）

	純生産額割合				就業人口割合(昭45)	
	東北		全国		東北	全国
	昭40	45	40	45		
第1次産業	25.1	18.3	11.2	7.5	37.7	19.3
（うち農業）	18.9	13.9	8.2	5.5	35.0	17.9
第2次産業	22.3	25.7	35.7	38.2	21.9	34.2
第3次産業	52.6	56.0	53.1	54.3	40.4	46.5

その農業の中で，米がひじょうに重要な基幹作物であることも知られている。農業の総粗生産額に占める米の割合は最近しだいに低くなり，全国ではいまや3割にしかすぎないが，東北では5割を保っている。（表―2）

農業総粗生産額に対する米の割合を県別に見ても，秋田の69%（昭46）を最高に，福島の39%を最低にしているが，その福島ですら，全国平均よりまだ高い。しかし，東北とても園芸，畜産の伸びが著しいことは，他の地域と変わりない。

表―2.　農業粗生産額構成比（%）

		米	やさい	果実	畜産物	養蚕	その他
全国	昭35	48	9	6	13	3	21
	46	33	16	9	28	2	12
東北	昭35	63	6	7	8	3	13
	46	52	10	8	19	2	9

では，こういう農業を支えている農家はどうだろう。東北の農家は全国平均に比べ，世帯員・農従者が多く，経営耕地面積が大きく，とくに田が多い。日本では規模が大きいといえる。農家所得のうち，農業所得はやや多いが，農外所得が少なく，トータルとしては少ない。そして出稼ぎが多いことがきわめて特徴的である。（表―3）

表―3.　農家経済の比較（昭.46）

	農就者人	経営耕地（a）					所得（万円）			出かせぎ農家割合%
		計	田	畑	樹園	牧草	計	農業	農外	
全国	1.5	106	63	27	12	5	154	47	107	5.8
東北	1.8	133	92	24	12	4	134	58	76	21.7

以上が東北の農業と農家の，あらましの平均像である。

2.　東北農業の将来

東北農業の将来を展望するには，まず日本農業の展望がなければならない。ところが，その日本農業については百家争鳴，目下，激動期にある転換期であるという声だけが喧しく，その将来の方向を，万人の納得のいくように，明確に指摘されたものはない。

農業は多くの要因に影響されて動いていく。大きくは世界の社会・経済あるいは政治の情勢の動きにかかわっている。それらの動きの予測と，日本農業への影響の度合いを，的確につかんで，正しく判断しなければならない。それはとても容易

なことではない。

いま，農業の動きに影響を与える大きな要因を，仮に農業の内部要因と外部要因というように分けてみよう。

内部要因とは，農業政策（たとえば構造改善事業自給率の策定といったもの），農家の作目や経営に対する自主的意向，農業技術の進歩の度合いなどである。

外部要因とは，一般社会経済の動き，すなわち交通の発達，他産業の動き，人口や生活環境の変化，それに政治情勢などである。これらが，そこの自然的立地条件とからみ合って農業が成りたっている。

ここでは，とくに東北地方の外部要因の大きな動きが，東北農業の将来にどう影響を与えるだろうかということを中心に考えてみよう。というのは，最近の農業の動きは，そのような農業外の諸要因，とくに地域経済の影響がひじょうに強くなっていると思うからである。

東北の地域経済は，前述のように，他の地域に比べて農業の比重が大きく，第2次産業がおくれている。工業の後進地域，いまように言えば開発途上地域である。

日本経済の中での東北の役割は，いままでは大都市圏への食糧供給の重要な基地であったとともに，労働力の供給地であったとも言えよう。いまでもそうである。

これからは経済成長，国土総合開発などの動きとも合わせ，東北自体の地域開発が進められるが，その中で農業の発展方向を明らかにしていかなければならない。その過程で，農業サイドの主体制をどのように活かしていこうとするのだろう。

東北の地域経済開発の進展に伴って，農業の将来にとくに強く影響を与えるだろうものとして交通・輸送体系の高度化と，工業化がある。さらにそれに平行して行なわれる農村環境の整備と，農民意識の変革などである。

輸送体系：東北の開発に，交通網の整備は最も重要な課題である。東北でも列島改造論の前から，交通網の整備が進められている。

なかでも東北縦貫自動車道は部分的に開通し，なお着々と工事は進められている。これが青森まで開通した暁は，東京―青森間のトラック輸送が，いまの約19時間から半分の9時間になるとされている。

そのほか三陸沿岸縦貫道路が完成され，日本海沿岸縦貫道路も計画され，これらの縦貫道路を横に結ぶ，いわゆる肋骨道路も着工または計画されている。

一方，鉄道では東北新幹線が，昭和51年度中に盛岡までの開通を待っている。さらに青森までは計画決定，日本海側も計画中である。さらに津軽海峡トンネルが着工中で，北海道までの直通も時間の問題となっている。新幹線によると，上野―青森間がいままでの特急で8時間半が4時間足らずとなる。

新幹線は直接に農産物を運ぶものではないが，旅客を新幹線に移すことによって，在来の東北本線を貨物輸送へ活用することが期待される。

＜目　　次＞

〝よく屈するものは，よく伸ぶ……。〟 …… (2)
チッソ旭肥料株式会社 取締役・福岡営業所長　木曽義忠

特集：〔地域農業将来の展望〕

その1.　〝東北地域農業を展望する〟…… (3)
東北農業試験場長　菅益次郎

その2.　〝関東・東山・東海農業の将来展望と問題点について …… (7)
農事試験場長　川井一之

その3.　〝暖地（九州）農業の将来図〟…… (13)
九州農業試験場長　吉川直行

あとがき …… (16)

海上でも新港湾第4次5カ年計画により，八戸，秋田，酒田，仙台，小名浜等の整備もつぎつぎ完成される予定で，カーフェリーの運航もふえていくだろう。港湾の整備は農産物の大量輸送を可能にする。

いままで東北地方は輸送体系が整わないため，首都圏から距離的にはそう遠くないのに，「みちのく」とされていた。たとえば，農林省の「農業生産の地域指標」にも，東北地方は「遠隔農業地帯」の範ちゅうに入っている。

政府の政策が，高度経済成長から安定成長に変わるとしても，計画に多少の時期的なズレはあろうが，交通網の整備はいぜんとして進められる。

交通輸送の高速化により東北は首都圏にしだいに引寄せられ，そして農業の姿もまた変わる。すでに福島県では昭和46年から「首都圏農業確立運動」をかかげて，新しい情勢に対応しつつある。

輸送体系の整備は農産物輸送の大量・高速化，荷いたみの減少などの利点から，首都圏という大市場を拡大する効果が大きい。とくに生鮮やさいや生乳の販路拡張が見込まれる。そして当然，作目の変化がおこる。

これはすでに日本各地で見られた現象である。しかし一方，輸送の高速化は消費地からみて，同じような立地条件を持った産地を増やすことになる。

たとえば前日に収穫したトマトは，福島産でも青森産でも，翌朝は東京神田市場に現われるという理である。つまり産地間競争が激しくなる。

それに勝抜くために価格，品質，量の安定供給で優位に立たねばならない。そのための生産性向上，技術の改新や生産・出荷組織の整備が要求され，その地方の農業が変わっていく。

工業化：交通・輸送体系の整備は工業開発のための立地条件をも有利にする。東北は工業用地や労働力の点で，他地域に比べまだ余裕があり，交通の発達と合わせて，工業化は活発な動きを見せている。「農村地域工業導入促進法」の制定以来，内陸農村部に工業導入が進められている。

一方，むつ小川原地区，秋田湾，仙台湾その他で，大型の臨海工業開発も予定または着工されている。これらは地価高騰や公害問題などで，必ずしも当初の目標どおりは進んでいない。

それにしても，東北の工業化が，先発地域に追いつけとばかり進められていくことには，まちがいがない。

工業化の進展は農業に地元消費の拡大，農外収入の増加のプラスがある。その反面，農用地を含めて地価高騰，大気・水の汚染などの環境悪化，農就者の減少と質的劣化など，マイナスも大きい訳である。

たとえば東北では昭和60年には45年に比べて，工業用地34千ha，必要労働力106万人の増加が必要とされている。(仙台通産局)。最近の地価の上昇率が，東北では他地域より著しいといわれている。

工業化に必要な労働力は，地元の生産年令人口の自然増のほか，農村の農業従事者の減少，出かせぎその他で都会へ出ていった労働力のUターンを当てにしている。

これらから考えると，工業化によって，農業では兼業化が一層進み，作目が変わり，また生産・流通の技術とシステムが変わることは明らかである。いま市町村を農業型，工業型，漁業型，住宅型，その他に分けると，東北では410町村のうち農業型(310)，工業型(94)が大部分を占めている。(工業型市町村とは就業人口のうち第2次産業就業人口が20％以上で，製造品出荷額が，昭和45年現在で20億円以上の市町村)。

この両型の平均を比べると，まだ工業化のあまり進んでいない昭和45年においても，工業型町村では二種兼業が多い。また，作目は工業型では，やさい，果実，豚，にわとりなどの特化係数が増えている。

一方，農業型では米，肉牛，養蚕などの特化が進んでいる。

おそらく，少ない労力で，高い地価に見合った作目を選ぶという方向を目ざすことになるだろう，(表―4，5)

表―4　専・兼業別農家割合(昭45)

	専　業	一種兼業	二種兼業
農業型市町村	12.9	49.3	37.8
工業型　〃	12.3	40.5	47.2

農村環境と農民意識：交通網の整備，工場の導入などは農村環境を大きく変える。云ってみれば

表―5　作目別特化係数の動き（東北基準）

		米	やさい	果実	肉用牛	乳用牛	豚	にわとり	まゆ
農業型	昭35	1.03	0.81	1.08	1.00	1.00	0.94	0.90	0.78
	〃45	1.06	0.77	0.99	1.11	1.02	0.93	0.85	0.81
工業型	〃35	0.94	1.32	0.87	1.00	0.96	1.13	1.23	1.37
	〃45	0.84	1.38	1.05	0.89	0.98	1.15	1.33	1.37

都市化または近郊化である。このことは，農民の生活または消費の水準を上げ，都市的生活様式が農村に入ってくる。

たとえば農民の住まいは都市近郊と同じくプレハブの文化住宅がどんどん増えている。すでに岩手で古来のわらぶきの「曲り家」（まがりや）は，文化財的な取りあつかいを受けている。上下水道，し尿処理，じん芥処理，医療施設等々は都市に比べてまだまだ至らぬとしても，しだいに整備されつつある。

しかし一方において，工業化，都市化は農業の持っている自然浄化機能をこえて，農村環境の破壊と汚染を進めていく。近年，東北では豚，にわとりの伸び率が他地域より高い。それは関東地方から水の汚濁，悪臭のために締めだされ，みちのくの国へ逃げのびてきたという感が強い。そうすると，東北地方といえども，やがては豚，にわとりにとって，義経と同じく安住の地ではなくなるかもしれない。

農業が人間によって行われるものである以上，環境の変化つまり都市化，近郊化が，そこに住む農民の生産と生活に対する意識を変えないはずはない。いままで，ともすると東北の農村と農民は，貧困と寒さに耐えながら純朴で，農業とくに米作り一途に取りくんできたというイメージが無いでもなかった。それが兼業化が進むと同時に，農業をもっと近代的な職業として，施設・機械を装備し，カッコよく働いて所得を上げようとする作目なり，生産方式が増えるであろう，そういう芽生えもみられるのである。

＊　＊　＊　＊

話がすこし工業化，都市化に片よったが，道路や都市の近くの農業地帯では，とにかく大きな変化が予想される。しかし，そのほかに東北ではいぜんとして，平野部の水田作が重要な位置を占めることもまちがいない。それに，これから進められようとする山の農業がある。

東北の米作はいま全国の¼を占めている。主要産地の平野部では工場が導入される反面，米作の近代化がますます進められつつある。そして米作のシェアはさらに高まるであろう。八郎潟の干拓地は別格としても，その大規模化，組織化は米作の新しい方向を示している。

一方，工業化がむずかしい山地の開発がとりあげられている。東北はいわゆる低開発地と称せられる山地が多い。北上，阿武隈の両山地をはじめとして，草地畜産を基幹とした総合的な山地開発が進められつつある。山地の開発にはなお多くの問題をはらんでいる。

ここでも交通網の整備の結果が，観光・レジャー資本の進出を促し，土地の買占めによって地価の異常な上昇を招き，これが農業的開発のための土地入手を大きく阻んでいる。

しかし多くの困難はあろうとも，東北では山地開発は国土利用上の大きな命題となっている。国も県も強力に施策を進めているわけである。

東北の農業は，水田農業と低開発山地の農業と，今後ますます急速に広がる都市近郊的な農業との三者が，それぞれ別個に，または調和しながら移り変わっていくのであろう。

狭い国土で，多過ぎるくらいの人間が，生活を向上させながら生きていくには，ある程度の経済成長が必要である。そのためには「狭い日本，そんなに急いでどこへ行く」といわれようとも，交通のスピード化は不可欠であろう。東北・北海道といえども，その影響を免れるわけにはいかない。

極端にいえば，日本国中総都市化または総近郊化である。そして，日本国中が画一化の方向に進んでいく。現に，日本国中どこを旅行しても，農村も都市も，外観で見るかぎり風土の特色がどんどん失なわれていく。そのことは，経済や生活の立地条件がどこでも似たようなものになっていくことを示している。

そういう中にあって，東北農業の将来の姿は，他の地域とどう違うのであろうか。極端にいえば，それぞれの地域で農業を成立させる要因のうち，違っているのは，気象と土壌と地形などの自然条件だけだとするなら，それらをどのように組み合わせて利用するか，ということに，これからの農業の行方はかかわっているのであろう。